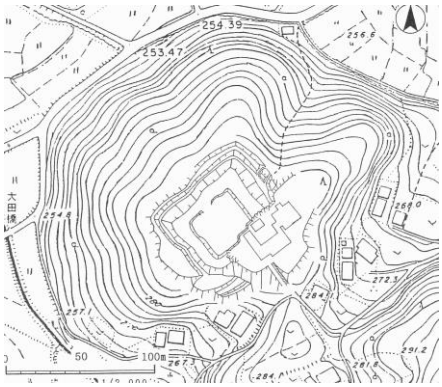
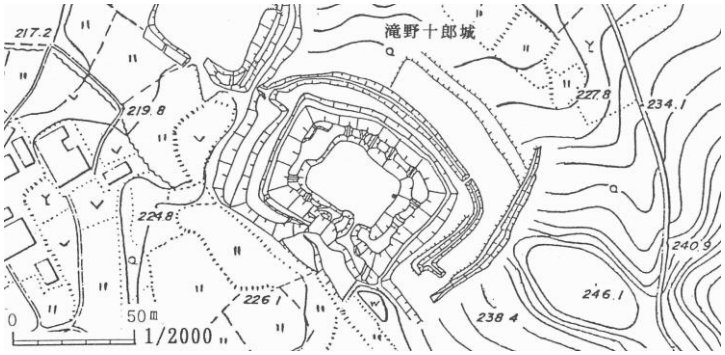
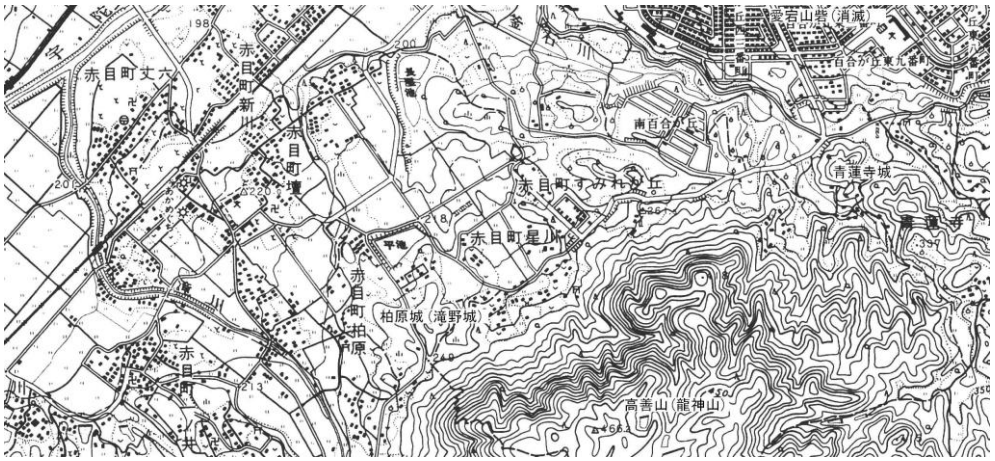
古城を訪ねて　青蓮寺城と柏原（滝野）城

市内には、中世城館と呼ばれる、主に室町時代に築かれた土塁（土手）や堀で囲まれた屋敷跡や城跡がたくさん残されています。これらは、それぞれの集落の指導者（地主）たる地侍（土豪・国衆）が集落内の百姓を支配するとともに、対外的な軍事拠点として築いたものです。当初は、南北朝期（14 世紀）の政治混乱に乗じて大型建物が造られ、15 世紀後半の応仁の乱以後の、いわゆる戦国時代に防御施設である堀や土塁が築かれます。これら地侍の城館は、伊賀地域では天正９年(1581)の天正伊賀の乱により終焉を迎え、乱後、豊臣秀吉の命を受けた脇坂安治により破壊されます。



青蓮寺城は、独立した丘陵上に築かれた四方に高い土塁と深い空堀がめぐる、単郭形式の城です。伝承では青木氏が城主であったとされ、城跡には多宝山青蓮寺地蔵院が建てられています。釜石川を挟んだ北側の、現在百合が丘住宅地に愛宕山砦がありましたが、この砦は天正伊賀の乱の際に、青蓮寺城の押さえとして織田方が築いたので、伊賀勢は青蓮寺城を捨て柏原城（滝野城）に籠城したのではないかという説もあります。

柏原城（滝野城）は、柏原集落背後の丘陵地にあり、四方土塁の伊賀型の城館です。高い土塁と三重の空堀がめぐっています。大手門の部分には貼り石があり、西側の土塁には櫓状の平場が造られるなど、他の伊賀型の城から一段進歩した形状が見られます。天正伊賀乱の際には、南伊賀勢の最後の拠点として籠城しますが、和睦により城を明け渡します。



鎌倉時代後半から、南伊賀を席巻した黒田悪党は、「そもそも当国の悪党の為体（ていたらく）、元より城郭を構え、」とあり、この時期から城郭としての祖形があったと考えられています。東大寺文書『悪党等縁者交名事』に大江一族の滝野七郎や七郎入道（青蓮寺兼住滝野）と見えることから、青蓮寺と柏原が古くから一連のものであったことが分かります。